

## 「夜間飛行」(サン・テグジュペリ)

一九二〇年代、航空輸送事業草創期の危険と困難に満ちた時代の話である。その頃、航空機は氣車や氣船等他の輸送機關と快速を競ひ、晝間ひるまは勝利を収める事が出来たものの、夜間飛行の困難が大きな弱點となつてゐた。それ故當初は政府筋も、航空機を「時速二百キロの快速で、暴風雨と、霧と、夜が秘め隠してゐる千百の障害物に向つて放つといふ」のは「軍事飛行にのみ許される冒険」と看做してゐた。然るに、ブエノス・アイレスに據點きよてんを置く航空郵便會社支配人リヴィエールは、「せつかく、氣車や氣船に對して、晝間勝ち優まさつた速度を、夜間に失ふといふことは、實に航空會社にとつては死活の重大問題だ」と抗辯かうべんして、多年に亘わたる奮闘の末、夜間定期航空便の航空網の開發に成功する。

そして目下、リヴィエールの航空郵便會社は南米に於てパタゴニア線、チリー線、及びパラグアイ線の三路線を運営し、それら三方向からブエノス・アイレスに集積する郵便物をフラン

ス迄空輸してゐるのだが、各路線の郵便機の操縦士達は、夜の闇と自然の脅威とに直面して、絶えず死の危険に曝さらされながら、獻身的に己が任務に勵はげみ、その成就じやうじゆに強烈な幸福感を味はつてゐた。一方、リヴィエールは全航空路線に互る責任を雙肩きうけんに擔になひ、時に深い不安と疲労に襲はれつつも、夜間定期便の飛行状況及び操縦士や部下達の勤務状況に毎夜細心の注意を拂はらつてゐた。何しろ「毎晩、空中で劇的な事件が行はれて」をり、「わづかな意志のたるみも」生死に關はる重大事故の原因となり兼ねぬ以上、過失の芽は如何に僅少きんせうでも容赦無く摘み取らねばならぬからだ。リヴィエールは非情な迄に部下に嚴格な要求を課し、非情な迄に過失を罰した。彼にとつては「延長一萬五千キロメートルにわたる航空路の全體に、便に對する信念がすべてを越えて行き渡」る以上の大事はなかつた。それ故、彼は云ふ、「愛されようとするには、同情さへしたらいいのだ。ところが僕は決して同情はしない。いや、しないわけではないが、外面に現はさない……僕はときどき、自分の力に自分ながら驚くことがある」。

處ところが、或晩、事故が起つた。パタゴニア線の郵便機が暴風雨に卷込まれ、聯絡が途絶とだえたのだ。リヴィエールは夫の安否あんびを氣遣きづかふ操縦士の妻の悲嘆ひたんを目の邊あたりにして、「人が行動することによつて、どれほど貴重なるものを傷つけるか」を痛感する。けれども、遭難が確實になつ

て、部下達が動搖の色を示しても、彼は「夜間飛行は停止されぬ」との「驚くべき」命令を發し、豫定通りフランス行きの便を發進させるのであつた。

童話「星の王子様」で有名なサン・テグジュペリの出世作である。アンドレ・ジイドは「序文」を寄せて、この作品に於て「いちばん僕の氣に入る」のは、「非人情になることなしに、自分を超人的な美德にまで高めてゐる」主人公リヴィエールの強靱きやうじんにして「崇高」な生き方であつて、これこそは「人間の弱點や、ふしだらや、自墮落じだらくなぞ」、「今日の文學が、あまりにも巧みに描寫提示べうしやしてくれる」ものに反して、「僕らが知りたいと思ふ」ものなのではあるまいかと書いてゐる。フランスの「今日の文學」へのジイドの批判はさて措きお、互ひに「愛されよう」とばかりしたがる偽善と感傷の現代日本に於て、サン・テグジュペリの強者の文學を眞に「知りたいと思ふ」讀者はどれ程ゐるであらうか。

ジイドは又、作者が主人公や操縦士達の生き方を通して、「人間の幸福は、自由の中に存在するのではなく、義務の甘受かんじゆの中に存在するのだ」との「逆説的眞理」を「明らかにしてくれだ點」にも「感謝」したいと書いてゐるが、これ又、今の大方の日本人には通じまい。

(堀口大學譯、新潮文庫)